

担当者 : D.K.

## Chapter 3 Classroom assessment

### 1. Life at the chalk-face

■ 教室におけるテスト (teacher test) と大規模な標準テスト (externally mandated test) との差異は何か？

- externally mandated test は存在するべきであるが、学習者が反感を持つ対象である。
- Latham (1877) では「試験の価値は...単なる基準であるという以上に、生徒が明確な目的に向かって学習し続けるためのエンジンの役割がある。」と述べられている。

⇒学習者を動機付けるとともに、教師と学習者の両者にとってフィードバックと達成度をもたらすような、学習を促進するエンジンとしてのテストの開発が望まれる。

⇒教室における学習を促進するものとしてのテスト (teacher test) の必要性

■ 教室テストへの 2 つのアプローチ

- ① Assessment for Learning: 実用的なアプローチで、self-assessment, peer-assessment, portfolio assessment などが含まれる。
- ② Dynamic Assessment: 社会文化理論の観点から検討される。

### 2. Assessment for Learning

■ 従来の教室内テスト

- 従来の伝統的な教室テストは sequential であった (Cumming, 2009: 91)。

①教師が教育的目標を設定する。②学習者が目標達成へ向かう活動・タスクを構築する。③どの程度成功したかを評価する。

⇒1980年代からテストの学習の仕上げ段階ではなく学習途中段階の役割に注目が集まった。

■ Assessment for Learning の発展

- 外部テストの多くが summative であるが、Black and Wiliam (1998) により学習を改善するための学習中過程で行われる formative テスト(学習者個々のニーズの診断を行う)に焦点を当てられた。
- Black and Wiliam の研究は理論的であることに加え、学習過程でのテストを用いた教室実践を大規模に行ったプロジェクトで Assessment for learning の効果を検証している。⇒学習方法としてテストを取り入れた授業とそうでない授業を比較した研究では、formative テストの効果が検証された。

## ■ テストの役割と Assessment for Learning

- テストの標準点をあげるための主な方法は、テストによって情報を集め、学習者のニーズにあった指導や学習活動を改良していくことである。テストのプロセスは動機や自己評価を高め、学習で得るものを増やすことができる。
- テストの重要な役割は、評定をつけることではなく、feedback を与えることである。評定をつけることは学習者の feedback への注目を減らす。
- (しかし、教師が評定をつけることを学習者・保護者・学校運営体は要望するため、葛藤が生じている。)
- 学習者の動機付けは「culture of success」の一部であり、学習者が活動を通して以前可能だと考えていた以上の到達度に達したと感じることにより動機付けされる。
- 学習の向上のために、①教師は学習者が何を学んだかを意識できるようにするべき(「評価」ではなく「記述」を行う)、②学習者は自分の能力のどの側面を向上させるべきで、どのように向上させるかを知るべき、③学習者が教師からの feedback に反応する/消化する時間を取り、学習プロセスのメタ認知的気付きを向上させるべきである。

## ■ 具体的な formative テストのデザイン

- 学習指導中のテストを通じた学習を支援する実践的な指導についても研究が行われており、その最も注目されるものが質問法である。
- 従来の研究において教室で質問が行われた際に学習者が思考する時間が十分取られていないことが報告されている。教師は質問を行った際には、教師は学習者が考える長い「待ち時間」をとるべきである。
- formative テストのもう一つの重要な要素は教室内タスクの選択とデザイン、そして学習者がタスクを行えるよう教室を運営する方法である。

○標準テストにおけるタスクと教室内タスクとの違い、

- 標準テスト: 信頼性確保のため多くの項目数が必要
- 教室内タスク: 項目数の制限はなく、多くの open-ended な質問を取り入れられる。

言語学習の目標と現在何が可能であるかの“gap”は近年 SLA 研究の焦点となっており、いくつかのタスクがこの“gap への気付き”を促すと言われている

## 3. Self- and peer-assessment

### ■ Self- and peer-assessment の効果

- 学習目標と現在の学習段階を把握するのに役立つ方法として self-assessment と

peer-assessment が挙げられる。

- self-assessment と peer-assessment は現在の学習段階と目標とする能力の“gap”に気づき、学習を促進する効果がある。

#### ■ Self- and peer-assessment の運用

- Black and Wiliam は学習者は教師が評価をする基準を知り、言語活動のサンプルのモデルを見てから評価の基準を考案し、相互評価を行うべきとしている。
- その際には学習者が「公平さ」「透明性」に留意できるようにすべきである。
- self-assessment と peer-assessment が機能するためには、学習者が自分たちの成果を評価するための訓練の時間をとることが必要である。訓練により、安定した結果が得られるようになる。
- 学習者自らが assessment を行うことは単なる評価としてではなく、学習における成果の質に気付く機会を与えることになり、学習を促進する。
- 学習者のポートフォリオの作成 (記録)により、4 技能についての一連の学習の成果が集めておくことができ、学習者のこれまで・現在の段階を知ることができる。

⇒結果 +自己評価・感想・反省 (+教師のコメント, feedback) も書き加えておくと良い。

## 10. Dynamic Assessment

- Dynamic assessment の理論は Vygotsky によって発展させられたものであり、認知能力は社会的に支援される相互行為によって発達するとする社会文化理論に依拠している。
- この理論では、学習者は現在の自分の学習段階と発達段階の差は発達の最近接領域の考えから説明される。
- 大規模テストでは学習者が基準を満たすか、もしくは学習者の集団の中での位置などに焦点が当てられるが。一方、Dynamic Assessment では学習者がどのようなニーズを持ち、また学習者が相互行為を通してどのような変化、成長を遂げたかを評価する。
- Dynamic Assessment では教えること以上に「学習者の自らの気づき」に主眼がおかれる。
- ここでは教師の役割は単なる“provider”ではなく“mediator”の役割を持つ。  
=学習者が自ら言語使用やコミュニケーションを修正していく力を養う支援をする者
- Dynamic assessment に関わる 3 つの理論:
  - ① graduated prompt: タスクの段階を徐々にあげていく
  - ② testing the limits: 現在直面している問題を述べ、それを解決する方法を検討する
  - ③ mediated learning experience: mediator と学習者が相互に関わり学習を促進する
- Lantolf & Poehner (2007) の例: 教師が生徒とのインタラクションを通して recast 等の feedback を行うことで、生徒の学習が行われる例
- Dynamic Assessment の弱点として、(a) mediator は学習者の気づきを促すのが役割であり、

「教授」の時間が多くないため短時間での大きな進歩は望みにくいこと、(b) **Dynamic Assessment** は **local** なグループでの相互行為において大きく効果を発揮するため、大人数クラスでの運営には留意が必要である。